

教職課程センターだより 第22号

発行日 2019年11月28日

巻頭言 学びの主体性を問う

教職課程センター長 橋本 洋治

プレーパークという場所を知っているだろうか。そこは冒険遊び場とも呼ばれ、プレーリーダーや保護者、住民といった大人たちはもっぱら見守り、子どもたちの興味・関心に基づいた自由に創造的な遊びを可能な限り保障する場のことである。多種多様な活動においては時に火を使うことなどもあり、通常はやや危険に思われがちなことでもそこでは許容される。我が国においては、家庭・地域社会の変化とともに子どもたちの生活環境から「時間」「空間」「仲間」といった要素が奪われつつある中で、危機意識をもった大人たちにより1970年代後半にその取り組みが始まったとされている。

一方で昨今は、遊びそのものがあらかじめ設定されていなかったり、既成の遊具がないと遊ぶことができないなどといういわゆる「指示待ち症候群」の子どもが増えているということも耳にする。上述したプレーパークの取り組みが問題改善のヒントになればと期待したいところではあるが、いずれにしても子どもたちの主体性が今どうなっているのかということは気にかかる。ただ、これは子どもたちの間だけの問題だと割り切れるものではないとも思う。そう。教職課程を履修している（しようとしている）学生の皆さんはどうなのだろうか。

講義に臨む自らの姿勢について振り返ってほしい。講義内容について、疑問を解決しようとすることはもちろん、自分の考えをもち、さらにはそれを表明、他者と共有できるように何らかの努力をしているだろうか。例えば、私は講義において教員から受講生への知識の一方的伝達を極力是正するために、いわゆるリアクションペーパーを用いているがその利用率がとても低い。評価に関係ないとなればなおさらである。珍しく声をかけてくれても内容の確認程度、ほとんどは試験形態や範囲のことで講義内容に関する感想すら話題になることはない。あまりにも素直すぎる。確かに、内容を把握することはまず大切であるが、さらに自分でも考えてみる習慣を身につけてもらいたい。それ自体が実社会の中で自律的な態度をもって新たな問題意識を生み出し、他者との協力によって問題を解決していける能力につながっていくものと考えられるからだ。そして、このような能力こそが、地域社会での人間関係の希薄化が進行している現在、教育という極めて創造的な領域に深く関わる教職を志す皆さんに最も求められている資質の一つではないのかと思う。

もっとも、大学に入学するまでそのような経験をほとんどしてきていないという根本的な問題もあるのかもしれない。でも、まずは私自身の拙い講義を反省すべきだろう。より身近に感じて興味をもってもらえるように、問いの機会を増やしてその質を上げるなどやるべき課題は多い。共に成長していこう。

さて、教職課程センターでは、今年度後期より教育自主研究サークルの支援を開始した。この中で、サークルとは教材研究や授業研究などの研究的な活動を行うため、学生の皆さんが主体的に運営するグループとされている。是非、教員も顧問として巻き込み、集って学ぶ喜びを体験してほしい。

3年生スタートアップ講座に参加して

スポーツ科学部 スポーツ科学科 3年 小市竜太郎

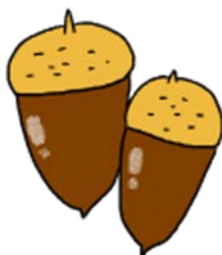


スタートアップ講座を受講して、これからの教員採用試験に向けて、何を準備すべきか、今の自分がどのような状況におかれて

いるのか改めて考えさせられました。教員採用試験とは、どのようなものなのか、それに向けてどのように学習を進めていくべきか、今何をすべきかを講座内で主に学びました。教員採用試験では、採用募集人員が多い自治体を受けるほうが合格しやすくなると知ることができました。具体的には、募集が少ない自治体は、安全策として経験のある人を採用する傾向にあるが、募集人員が多い自治体は、幅広い人材を採用する傾向があると知り、別の自治体も併願しよう思いました。

教員採用試験は、選考試験であるため、自治体の選考基準を把握しておく必要があり、自治体分析が必要になります。一般的な学習をするだけでなく、自分が受験する自治体が、どのような人材を求めているのかを理解しておく必要があります。そして、同じ自治体を受験する仲間とともに情報共有することが合格に繋がるため、自主ゼミの編成が求められることを知りました。スタートアップ講座を受講したことによって、自分の中で少し焦りを感じ、早めの準備が合格への一番の近道だと感じました。

試験まで残り10ヶ月となった今、教職教養から基礎を固めようと学習しています。講座内で紹介された教員養成セミナーの雑誌を講読し、一般教養対策講座を受講することも決意しました。残された時間でより効率よく目標に向けた学習をしていきたいです。





教員採用試験二次対策講座に参加して

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 佐藤あおい

●何を求めて参加のエントリーをしたのか

二次対策講座では、自分が受験する自治体の試験内容に合わせて講座を受けることができると聞いたので参加することにしました。また、試験まで残り数日しかなかったので、本番にむけた最終確認の場になることを期待し、エントリーしました。

●どのような気持ちで対策講座に臨んだか

試験まで残り数日ということもあり、焦る気持ちが大きく、対策講座で周りの人のいいところ、実際に教員になった先輩の真似できそうなところを盗もうという気持ちで臨みました。

●教員採用試験の二次試験にどのように役立てたか

私はこの対策講座で模擬授業を選び参加しました。模擬授業では、受験する自治体の出題方法と同じ出題の仕方、時間配分で実際に何人もの先生方に見ていただきました。自分と同じテーマで先輩が模擬授業をやっているのを見ながら、子どもたちへの言葉かけの方法、表情、時間の使い方などを学ぶことができました。

講座終了後、そこで学んだことを試験までに自分もできるように何度も練習しました。教員採用試験の二次試験では、先輩がやっていたようにはできませんでしたが、笑顔で子どもたちに語りかけるように話す、机間指導のときに子どもたちに共感しているような発問をすることなどは意識できました。

先生方や先輩のアドバイスがもらえ、それを自分のものになしようと努め、自信を持って実際の試験に向かうことができ、それが最終的に採用という結果にも結びついたのではないかと思います。二次試験直前対策講座に参加してよかったです。



教員採用試験二次対策講座に参加して

子ども発達学部 心理臨床学科 心理臨床専修4年 中島眸

二次対策講座に参加したことで、試験当日を良いイメージで迎えることができたと思っています。午前の全体会では、現在教員をしている先輩方のお話をお聴きしました。現場で働かれている先輩方は、大変ながらも日々子どもたちと関わることを通して大きなやりがいを感じていることが伝わり、とても輝いて見えました。

全体会後の体験講座では、私は模擬授業に参加しました。そこでは、事前に作成した指導案と教材をもとに先生方と先輩方に見ていただきながら模擬授業の実践を行いました。先生にタイマーで時間を計っていただき、実際に目の前に子どもたちがいる想定で行った授業は緊張したもの、**「この緊張感を感じておくことで試験も乗り越えられるはず！」**と自分に言い聞かせ、取り組みました。また、一緒に講座を受けた友人の授業を見たり、先生方や先輩方からのアドバイス・指導を受けたりすることで新たな気づきを得、さらに授業内容を深めることができたと思います。採用試験は合格が分かってしまうものですが、それでも対策講座を受けたことで試験当日をより意識できたり、自分を見つめ直したりする貴重な機会になりました。

今回の二次対策講座を始め、採用試験を迎えるにあたって、一緒に教職を目指す友人、先生方、先輩方に何度も励まされ、手厚い指導をしていただいたことに感謝しています。



合格体験記 横浜市（小学校）

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 福原創

○はじめに

私は、今年度愛知県と横浜市を受験し、横浜市のみ合格しました。愛知県は残念ながら二次試験で不合格という結果でした。皆さんの参考になるかはわかりませんが、試験対策等を書かせていただこうと思います。

○筆記試験対策

使用したテキスト

- ・教員採用試験 一般教養 らくらくマスター
- ・教員採用試験 教職教養 らくらくマスター
- ・教員採用試験 小学校全科 らくらくマスター
- ・愛知県の教職・一般教養、小学校教諭の過去問

私は、3年生の3月から勉強を始めました。CDPは受けていなかったのので、独学で勉強に励みました。しかし、どうやって勉強すればいいかわからず、ただテキストを眺めている日々が続きました。本格的に勉強が始まったのは4年生になってからでした。きっかけはネットで調べた教員採用試験対策についての記述でした。そこには自治体の試験の特徴が全て載っていました。教職教養のどの部分が頻出など細かく書いてあったので、とても参考になりました。また、ユーチューブにも試験対策の動画が多数あったのでそれも参考にし、テキストと照らし合わせながら勉強しました。紙媒体での勉強が苦手だったので、ネットと掛け合わせることで、勉強がそれほど苦ではなくなりました。また、復習などにも使うことができ、便利でした。

○口述試験対策

面接や模擬授業の対策はほとんどやっておらず、一次試験が終わってから本格的に始めました。主に頻出の質問の回答を考え、面接官を友達にやってもらいながら対策しました。自治体によって頻出の質問は変わってくるので、調べて対策することをおすすめします。

○おわりに

試験対策は人それぞれ異なると思います。自分の合っている勉強法を見つけ出すことが合格への第一歩です。また、勉強を始める前に自分に合った自治体も探すことも重要です。必ずしも地元での就職が良いというわけではありません。自分の個性を發揮できる場所を探し、勉強に励んでください。努力すれば報われると思います。頑張ってください。



合格体験記 愛知県（特別支援学校）

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 山本 柚月

私は高校3年生のときから教員になりたいと思い始めました。教員採用試験を受験するにあたり、愛知県だけではなく、他の自治体を併願するかとても悩みました。結論として、併願をすれば合格する確率は高くなるが、自治体によって試験の傾向も違うから対策するのが大変だと考え、本命の愛知県のみを受験することに決めました。そして結果として、愛知県に合格することができました。私がどのように試験勉強に取り組んだかを述べます。

教員採用試験の勉強を意識し始めたのは、3年生の12月頃からでした。この頃、4年生の教員採用試験合格体験報告会があり、教員採用試験に合格した先輩の姿を見て、私も絶対に合格したいと強く感じました。報告会が終わった後、愛知ゼミを立ち上げ、定期的にメンバーと願書を書いたり面接練習をしたりするようになりました。また、2月から始まったCDPなどの対策講座も受講し、本格的に教員採用試験の勉強を始めました。

1次試験にある一般教養、教職教養に関しては、愛知県は幅広い範囲から出題されると感じたため、一般教養、教職教養の参考書を購入し、幅広く勉強を進めました。専門教科に関しては、私は中学社会で受験したため、地歴公全ての科目からまんべんなく出題されるので、勉強は本当に大変でした。また、私は大学受験でセンター試験を受験していないこともあり、知識面は劣っていました。そんな中で、センター試験の参考書を友人から譲ってもらったり、購入をしたりして勉強を進めました。愛知県ではセンター試験レベルの問題も出題されるので、センター試験の参考書でも十分に対応できると感じました。面接に関しては、愛知ゼミの中でたくさん行いました。教職課程センターにいる先生にお願いをしたり、学生だけで面接練習を行ったりしました。最初は上手く話すことができず、面接には苦手意識がありました。しかし、回数を重ねるごとに、コツが掴めるようになり、次第に面接に対する苦手意識はなくなりました。

4月に入ると、家では怠けてしまうと思い、ほぼ毎日教職課程センターへ通い、勉強を行いました。1次試験が近くなると、愛知ゼミの中で面接練習を週2、3回行うようになりました。愛知県は人物重視の傾向があるため、面接練習をたくさん行って損はないと思います。面接の試験を受けてみて、愛知ゼミの中でたくさん面接練習を行って良かったと感じています。2次試験までは、大学が閉鎖期間に入る前は毎日大学へ行き面接練習を行いました。閉鎖期間に入ってから自宅では専門教科の勉強や、愛知県の小論文の過去問を参考にひたすら文章を書き、書き方や時間の感覚を体に覚えさせました。

教員採用試験を振り返って、本当にたくさんの人に支えられたから最後まで諦めずに試験に挑むことができたと感じています。支えてくださった友人や先生方、家族、アルバイト先の人には感謝の気持ちでいっぱいです。この感謝を忘れずに、教員になる自覚を持ちながら残りの大学生活を過ごし、自分自身を高めていきたいです。

2019年度の教員採用試験対策の実施状況について

【2019年度の教員採用試験と対策の方向性】

2019年度においては、教職課程センターとは関連をもちながらも、別途「教員採用試験対策WG」が組織された。ここでは、キャリア開発課やAP事業学習アドバイザーとの連携のもとで、これまでの教員採用試験対策の在り方を振り返り、受験勉強に勤しむ学生のニーズにあった教員採用試験対策の方向性や方法について繰り返し議論を行った。

一方で教職課程センター運営委員の先生方（多様な教科・専門性を有する）が当番制で、教職課程センターに駐在することになり、ここでの先生方によるアドバイスが学生にとっての教員採用試験のモチベーションの維持につながったことも指摘できる。こうしたアドバイスがあって、自主的な勉強会の組織、面接・集団討論・模擬授業に関わっての自主ゼミの組織が促されてきた。

私自身この半年間、教員採用試験対策の企画に携わらせていただいたり、学生による自主的な勉強会に関わらせていただいたりするなかで、教員採用試験で良い結果を残していくうえでは、小手先のテクニックのみの向上に焦点化するのではなく、常日頃からの学びや生活のなかで、教師としての生き方を自分のなかでどのように位置づけるのか、文化や知識を子どものニーズに応じた形でどのように伝えるのかについて、学生自身が考え、検討し、行動に移していくことが不可欠であると感じてきた。

上記から、教職課程センターとしての課題は、他大学でも実施されているような組織的な「教員採用試験対策講座」の安定した運営とともに、通常の「講義」「演習」との連続性をもった「授業・教材研究」「多様な教育・社会問題」「子ども・若者の様々な事例」等に関わる「研究」「検討」を、教職課程センターに所属している教員とともに行っていく機会を設けていく必要があると考えている。そうした意味で、この間結成されてきた「教育自主研究サークル」の支援策をさらに講じていくことは不可欠な課題である。

【2019年度の教員採用試験実施状況】

(3年生)

- 7月 3年生対象教員採用試験スタートアップ講座
- 12月 合格体験報告会（教職課程履修者の集い）
- 12月 ステップアップ講座
- 3月 教員採用試験対策・春講座

(4年生)

- 6月 教員採用試験一次対策講座
- 8月 教員採用試験二次対策講座

(スポーツ科学部助教・教職課程センター兼担教員 石井智也)



卒業生からのたより



子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修 2018年度卒業
千葉県小学校教諭 北村 康太郎

千葉県で教員をやっている北村です。私は小学校2年生の担任をしています。現在、働きだして半年が経ちました。感想としては思っていたよりも大変ということです。授業づくりだけでなく、校務分掌や行事の準備、研修などたくさんやることはあります。実際、最初の頃は分からないことだらけで、時間だけがどんどん過ぎていくだけでした。正直辛いと思うこともありましたが、同期や先輩、管理職の方々に助けてもらい今までやっていくことができました。私の職場はそれぞれが個人で働くだけでなく、チーム学校として仕事をしています。改めて周りの環境が良いと思いました。

仕事が多い分、学ぶ事も多いです。それぞれ分野ごとに話していこうと思います。

①【授業】

教育実習も2年生だったので少し楽だと思っていました。実際はそうはいきませんでした。クラスが変われば子どもは変わります。同じ授業でもそれぞれのクラスの実態に合わせていく必要があります。そのために必要なのは児童理解です。休み時間に話すことはもちろんですが、授業になると子どもたちは変わります。なので、授業中は常に子どもたちのことをよく見るように心がけています。当たり前だと思う人もいるかもしれませんが、やってみるとなかなか難しいです。机間指導もただ回るだけでなく、その都度チェックをしていくと指名計画を立てることができ、遅い子を支援することができます。教材研究も毎日やっています。

②【生活】

全ては学級経営から始まると言っても過言ではないです。学級経営がきちんとされているクラスは落ち着きがあり、問題が起こることも少ないです。私のクラスではルールを提示することはもちろんですが、何か起こった時には子ども自身に考えさせるようにしています。そうすることで子ども自身が成長することができます。また、「先生はこれをやったら怒る」ということを始めに伝え、それを破った子には怖いと思われるぐらい指導をします。線引きが大切です。

③【校務分掌】

初任ですが情報主任を任されています。電子機器の管理や行事での仕事、ICT導入のための研修などに参加しています。最初の職員会議で役職を告げられた時は、初任でそのような役職をもつとは思っていませんでした。いきなり言われて何をしたら良いのか分からなかったです。前任の先生にずっと聞きながらその都度覚えていき、最近1人でもできるようになってきました。

ここまでの話を聞いて「教員は大変。辛そう。」と思った人もいると思います。その気持ちは間違っていないと思います。しかし、忙しいからこそ得られることも多く、やりがいのある仕事です。少しずつ自分も子どもも成長していくのが分かります。常に学ぶ姿勢をもち、自分自身を高めていってください。応援しています。





教員になって

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 2016年度卒業
神奈川県特別支援学校教諭 亀山 健太

私は知的障害のある児童生徒が在籍する特別支援学校で、中学部のクラスの担任として働いています。今回は私が特別支援学校で働いている中で大切にしていることを2つ紹介したいと思います。

・チームティーチング

まず一つ目はチームティーチングを大切にしています。転校してきたばかりの生徒が授業に参加することが難しかったので、他の教員に相談をしたところ、まずは生徒がこの学校を安心できる場所だと理解することが大切なのではないか、という意見をいただきました。それからは学校の中を生徒と一緒に見て回り、本人が納得するまでいろんな場所を見学したところ、授業にも自発的に参加できるようになってきました。特別支援学校では主に2人から3人の教員で一つのクラスを運営していきます。クラスの生徒をたくさんの教員が多面的に見ることで、生徒の実態がより正確にとらえることができます。だからこそ、教員間の情報共有を徹底することが大切です。また、連携をとり役割分担をすることで、初めてチームティーチングが成り立つと私は考えています。

・生徒が自発的に取り組みたいと思える授業を実践する

特別支援学校では何らかの特別な支援を必要とする児童生徒が在籍しています。教員は自分の学年やクラスの生徒の実態を把握し、生徒の実態に合った目標を考え、支援の手立てを考えて授業を組み立てています。支援を考え、生徒が取り組みやすいような工夫をすることはとても大切です。その中でも私が特に大切にしていることは、生徒が自発的に取り組むことができる授業を実践することです。先日中学部の理科の授業で、電気の学習をしました。この学年は機械を操作することが大好きな生徒が多いため、手回し発電機を使用してライトをつけてみたり、プロペラを回してみたりしました。このように生徒の好きなものや興味関心のあるものを把握しておくことで、生徒が自分から「やってみたい!」、「さわってみたい!」と思えるように授業を展開することができると私は考えています。生徒も授業内容がわかりやすくなり、授業の目標を達成する大きな近道となります。

最後にチームティーチングを成り立たせることと、自発的に取り組みたいと思える授業を展開することはどちらも全く違うことのように思えますが、生徒の実態を把握していなければ、どちらも成り立たせることはできません。まずは一番に生徒としっかり向き合い、自分なりに生徒を把握し、それを他の教員と共有すること。大変なことだと思いますがとても楽しく、やりがいのある仕事です。いつか会える子どもたちの顔を夢見て、がんばってください。



教育実習体験報告

中学校実習を終えて

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 森 柚香

私は長野県松本市の中学校で教育実習を行いました。市街地の中規模学校である母校は、私が在学していたときに比べて、学校行事や部活動の時間が削減されているという実態がありました。担当させていただいた3年生は部活動の大会を目前に控え、さらに進路選択にも直面しはじめていているという時期でもあり、非常に緊張感があるなかでの2週間となりました。

生徒との距離を縮めることは簡単ではありませんでした。しかし、授業中に声をかけたり、自分の授業の感想を聞いたりすることで、少しずつ本音を話してくれる生徒が増えてきました。教員が自ら深入りしようとするのではなく、生徒が助けを求めてきたときや、つまづいてしまったときに寄り添えることが大切だと教えていただきました。

社会科での授業づくりで力を入れたことはふたつあります。1つ目は「教材研究」です。歴史の授業を行うにあたり、松本市の国宝「旧開智学校」に見学に行き、実際に自分の目で見てきたことを生徒たちに伝えられるように工夫をしました。2つ目は「導入」です。生徒の考えや疑問をもとに授業を展開していくために「学習問題→予想→学習課題」という流れの設定を重視しました。担当の先生にアドバイスをいただき、生徒やクラスに合わせて、同じ授業でも導入の仕方を変えることにもチャレンジしました。今回の教育実習では授業づくりを通して、社会科の魅力や面白さにより気づくことができました。そして、それらを「生徒に伝えたい」という気持ちが自分を動かす原動力となりました。

4月からは小学校教員として働くこととなりますが、中学校実習で学んだように目の前の子どもたちに合わせた授業や関わり方ができるように精進していきたいです。





今後の予定

【3年生（1・2年生の参加も可とする）】

教員採用試験合格者体験発表会

2019年12月19日（木）13：25～16：35 美浜キャンパス 1511教室

【1年生】

教職課程オリエンテーション

2020年 3月27日（金）4・5限 美浜キャンパス・東海キャンパス

教職課程登録期間

2020年 3月下旬を予定

